

# 全体発表 1

## 全校体制のあり方

～ 2校6年間のSSH学校運営の工夫～

発表者：鹿児島県立国分高等学校

校長 山崎 巧

# SSH校長 6年間の経緯

	錦江湾高校（前任校）	国分高校（現任校）	全国大会実行委員長等
H28	経過措置 2年目 3期申請→採択	S P P 1年目	 校長間・職員間連携強化 SSH全校体制，運用について 情報交換，多様な議論を展開
H29	3期1年	1期申請→採択	
H30	3期2年	1期1年	理数科全国大会 県SSH協議連絡会
R1	3期3年 中間評価(s)	1期2年	国語全国大会 SSH交流フェスタ
R2	3期4年	1期3年 中間評価(s)	コロナ下
R3	3期5年(申請)	1期4年 申請準備	コロナ下
R4		1期5年(申請)	新指導要領施行



# 発表項目

- 1 前任校でのSSH運営 意思形成
- 2 現任校でのSSH運営 見える化
- 3 SSH学校運営ファクター
  - ① 運営の理念と方法
  - ② 働き方改革7ポイント
  - ③ 学校でのイノベーションの共有
  - ④ 謝辞

# 前任校の錦江湾高校

## 錦江湾高校の概要

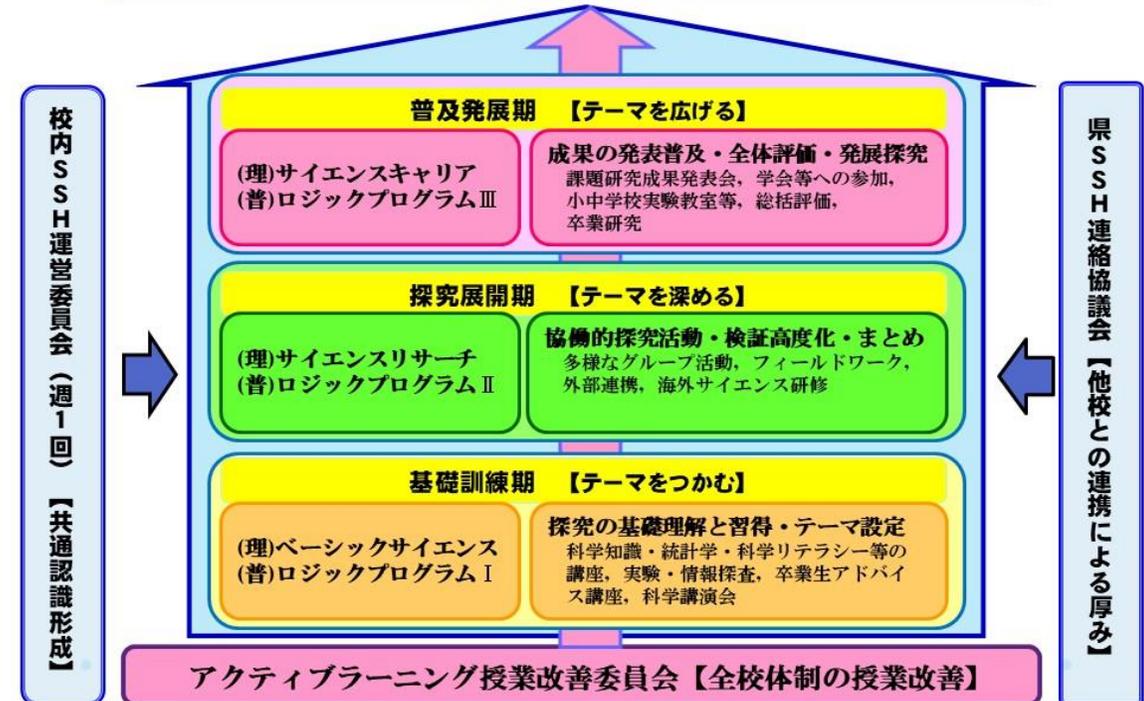
- 創立50周年
- 普通科4クラス・理数科2クラスの全校18クラス
- 理数科課題研究50年の県パイオニア校
- SSH第3期5年目
- 剣道・バレー・ヨット・科学系部活動等

### R3 第4期申請

- ① 第3期は全国でも高い評価であり、本県・全国のSSHパイオニア校として、今も校長のリーダーシップの下、絶えざる改善に努め、高い成果を出している。
- ② 第4期申請は、蓄積してきた強靱なレガシーを継承しながら、さらなる「深化・高度化」を推進する方向で、全職員で斬新なプログラムを作成していると聞いている。

## 錦江湾SSH・コンセプチュアル・ダイアグラム

生き方を科学的・論理的にデザインできる探究的人材



# 錦江湾高校SSH沿革の流れ

① H13 SI委員会→県→申請

① 1期 H17~21 理数科採択

② 2期 H22~26 + 重点枠  
理数科採択

※ 3期申請→**不採択**

③ 経過措置 H27~**28**

※ **普通科・理数科全校体制→採択**

④ 3期 H29~R3

※ 令和元年→中間評価

基礎枠+重点枠 (2期目の実績, 全国レベルの賞100)

- ① 米国気象学会表彰
- ② 北京青少年科学技術大会 国際部門優勝
- ③ 中国国際大会入賞
- ④ 全国高校総合文化祭(全国1位)
- ⑤ SSH生徒研究発表会 JST理事長賞2回
- ⑥ 全国科学技術 科学技術政策担当大臣賞
- ⑦ 全日本発明工夫展 経済産業大臣賞

※ 全国高校大根研究コンソーシアム企画 等々

- ① 主体性が求められる
- ② 全体性が求められる

# 錦江湾高校で平成28年に議論したこと

## 4月～5月に議論したこと

### 初発の職員意見

- ① 理数科SSHは一体何だったのか
- ② 目的や成果が職員全体に見えない
- ③ 働き方改革の中で負担が大きい
- ④ SSHは継続すべき
- ⑤ よく分からない

個別に沢山の意見…校長室訪問・メール

### 経営上の問い

本校のSSHとは何であったか、  
SSHを継続または終了する理由は何か

→インタビュー(職員・県教委・文部科学省・  
JST・歴代校長・県外SSH校長・同窓会・鹿  
児島大学・評価委員・PTA等)

## 5月～10月までオープンな議論

- ① SSHや課題研究
- ② 働き方改革
- ③ 進路指導・授業改善
- ④ 部活動指導
- ⑤ 生徒募集
- ⑥ 中教審答申・高大接続改革

一体的議論(職員会議・外部委員会等)

不断の共有

### 管理機関との協議

県立SSH校は1校のみだが申請の  
方向性については職員全体のベク  
トルにより決めさせて欲しい  
(任せて欲しい→了承)

情報

## 男性 大学院博士後期課程

### 1 高校で学んだこと(昆虫)

課題設定から発表までの研究プロセス。実験や観察の結果に基づき議論する論理的思考。グループ研究でのリーダーシップ、協調性、計画性。高校の先生と大学教授からの双方の指導で大学での研究を絶え間なくイメージできた。



### 2 大学・大学院で役立ったこと

卒研や大学院をイメージして入学。科学的思考やプレゼン力は全研究で活かされている。高3で日本昆虫学会，大4で国際昆虫学会議で発表。研究資金獲得で優位に立てた。いつかはSSHの後輩たちと共同研究を試みたい。

## 男性 大学院博士後期課程

### 1 高校で学んだこと(生物学)

研究の楽しさ。教授・学生の助言で，専門的な知識や，目的に合わせた実験や統計解析手法の選定方法を学ぶ。SSHが無いと大学連携は行われず，今の自分はなかったと思う。



### 2 大学・大学院で役立ったこと

大学から大学院まで役に立ち続けている。一朝一夕に身につかない科学研究の力は，国内外を問わず発表をする機会に役立っている。理系大学では研究は避けて通れないので，高校のSSHで科学的思考や表現に触れて慣れておくことが大事。

# 錦江湾高校でのインタビュー調査②（レガシーの発見と蓄積）

女性 石油基地工務グループ 管理担当

## 1 高校で学んだこと

大学の先生にも指導を受け、自発性や科学的思考力、原因を追究して調べる力。プレゼンテーションのノウハウを学んだ。

## 2 大学で役立ったこと

大学インテンシブ・プログラムに進んで参加。実験器具の操作、レポートの書き方も分かり、プレゼンもでき、負担感なくレベルの高い研究を楽しめた。

## 3 仕事で役立ったこと

仕事の海外での会議はSSH英語プレゼンに類似し、何ら困らずレクチャーできた。また、機械トラブルの原因を分析し、伝わる報告書を書くことができる。

男性 鹿児島県信用保証協会・金融

## 1 高校で学んだこと

地道なデータ取りの大切さ。仮説が点から線につながるのが印象深かった。

## 2 大学で役立ったこと

講義プレゼンで資料を分かりやすく作り、筋道立てて説明できること。

## 3 仕事で役立ったこと

ポスターセッションにより取引先とのコミュニケーション能力。社会では相手の意見や質問を聞いて、いかに的確に答えるかが求められる。

※ SSH＝生きる武器

## What is SSH? (共通理解)

- ・ SSHとは**正のレガシー**である。  
生徒が社会や大学で主体的に**生きる力**,  
**生きる武器**を持たせる教育レガシー
- ・ 国際性ある科学系人材育成は, これからの  
どんな社会にも, **生き方をデザイン**できる  
キャリア教育の視点である

## 普通科の動き (H28. 9月~)

- ① 1年・2年とも総学の変革  
→ **課題研究へ移行** (試行)  
→ **ロジックプログラムの原型**
- ② 多様な提案 (学校改革案)  
高大接続・進路指導・授業改善等  
※ **図書館活用活性化** → SSH図書館

## 意思形成

(SSHがなくても)

理数科: 大学連携で課題研究推進。  
普通科: 新たな「課題研究」を進める。  
**「SSH(課題研究) = 一部理科職員」という  
構図が払拭**

- 10月末 SSHの申請決定 (反対者の不在)  
**働き方改革**を進める (残業を減らす)  
一人のリーダーではなく**複数のファシリテーター**の成長
- 11月末 申請書類の提出  
(生徒の主体性) (全校体制)
- 1月 文科省でのヒアリング
- 3月末 第3期採択

## 「生徒主体の深い学びを目指す錦江湾SSHプロジェクト」 －生き方を論理的・科学的にデザインできる，グローバルで探究的な 人材育成を目指すプログラムの開発と実践－

- 学校設定科目として理数科に「アクティブサイエンス」、普通科に「ロジックプログラム」を設定，全校規模で実施。その際，理数科12年間の手法を普通科に移植。
- 1年次を基礎訓練期，2年次を探究展開期，3年次を普及発展期とし，深化拡充する探究モデルを展開する。
- 大学や企業等連携の多様化を図り，高度な課題研究とともに社会貢献も推進し，生き方をデザインする力を育成する。
- 国際性の向上・普及のため，海外プレゼン交流を推進する。
- 図書館にSSH図書室の機能を持たせる。
- 県高校SSH理数教育校連絡協議会の運営と県課題研究プレゼンテーション大会を開催する。

# 第1期 スーパーサイエンスハイスクール 国分

## 霧島から世界へ サステナビリティの視座を持った科学系人材育成プログラムの研究開発

- 経年的に、**基礎訓練期(GS)**、**探究展開期(SR)**、**総合探究期(SS)**と積み上げるカリキュラムを開発することで、普通科を含む全生徒が**主体的に科学的探究活動**に取り組む。
- 科学への導入として**地域課題を科学的な観点で学習**することで、将来持続可能な社会の創造に主体的に貢献しようとする人材を育成する。
- 先端技術企業や大学、研究機関、NPO法人、海外学校等と広汎な**産学公民連携を推進**することで、**生徒主体の探究活動を活性化**する。
- 理科と連携した科学英語教材の開発、海外交流校と連携したサイエンス研修等を通して**国際性を育成**する。
- 小中高の相互交流を推進し、**地域の理数教育のレベルの向上**に寄与する。

# 国分高校SSHの概要

- ## 国分高校概要
- 創立108年
  - 普通科7クラス・理数科1クラスの全校24クラス
  - 理数科28年目。15年前よりSPP等獲得によりカリキュラム改革
  - SSH第1期4年目（平成30年度指定）
  - ハンドボール・水泳・サイエンス部・自主ゼミ等

サステナビリティの視座を持ったグローバルリーダーへ

世界へ羽ばたくグローバル人材を育成

- ◇ マレーシアでの国際研修
- ◇ 世界ジオパーク認定に向けた活動
- ◇ 世界で羽ばたく科学技術者講演会
- ◇ 学校設定科目「科学英語」の研究・実践
- ◇ サイエンス部の国際大会出場へ向けた取組

主体的な探究活動

- ◇ 多様な領域を協働で探究，確かな研究力を育成
- ◇ 産学公民連携の推進
- ◇ 自主ゼミ，サイエンス部，SSH生徒委員会
- ◇ 理工系領域を志す女子育成プログラム（桜蔭プログラム）

世界に誇るふるさと霧島に学ぶ

- ◇ 自然科学：霧島・錦江湾（国立公園），桜島，干潟，河川，動植物
- ◇ 科学技術：京セラ，SONY，鹿児島大学，第一工業大学，工業試験場
- ◇ 歴史文化：縄文の森，埋蔵文化センター，大隅国府，神話，舞鶴城
- ◇ 芸術：霧島アートの森，みやまコンセール
- ◇ 地域創生：霧島市「ふるさと創生総合戦略」事業，霧島ジオパーク

連携

産：地域企業（京セラ，SONY等）  
 学：鹿児島大学，第一工科大学，九州大学，JAXA  
 公：霧島市霧島ジオパーク推進課，霧島市教育委員会  
 民：地元人材・卒業生，NPO

# スーパーサイエンスハイスクール 4年目普通科の快挙!!

## 4年間の普通科の活躍

### 令和元年度

グローバルサイエンティスアワード”夢の翼”/ソラシドエア賞  
県SSH交流フェスタ/ポスター発表部門最優秀賞

### 令和2年度

県SSH交流フェスタ/ポスター部門最優秀賞  
サイエンスアゴラ2020 LCSオンラインワークショップ  
鹿児島県統計グラフコンクール/学校賞  
高校生よかアイデアコンテスト/最優秀賞  
高校生論文コンテスト第4回自然環境工学賞  
高校生国際シンポジウム/最優秀賞  
(シンガポールの国際大会出場権獲得)

### 令和3年度

高校生課題探究発表会/最優秀賞  
鹿児島県統計グラフコンクール/学校賞



国分高校SSHキャプテン  
まいづるん



Wakuwakuが  
君を待っている!

## 学校全体

全国トップレベル

文部科学省によるSSHの取組に対する評価があり本校は学校全体の取組が高いと評価されました。

### 評価されたポイント

- ・普通科・理数科共に積極的に研究に取り組んでいる。
- ・各教科で探究型授業が広く取り入れられている。
- ・女子生徒の科学技術に対する興味・関心も高まっている。

## 普通科

全国トップレベル

## 竹林の研究でシンガポールの国際大会出場権獲得!!

竹班が、鹿児島島の山の手入れができていないことに着目し、生えすぎている竹を材料として有効に使うためのシステムを研究・提案しました。高校生国際シンポジウム（地域課題分野）で最優秀賞を受賞し、シンガポールで行われる国際大会で日本代表として英語で発表する機会を獲得しました。普通科の世界大会出場権の獲得は、初めてです。



## 理数科

全国トップレベル

## セミの研究で小泉進次郎大臣より環境大臣賞を受賞

生物班が、奄美や沖縄のセミが出水市にいることに疑問を持ち、調査・研究を行ったところ、そのセミが徳之島産であることを突き止めました。アメリカで行われる科学のオリンピック ISEFに日本代表として、英語で発表します。日常の不思議に疑問を持ち、ひたむきに研究に取り組むことが「環境大臣賞」の受賞につながりました。



# SSH指定4年間の理数科の活躍

## スーパーサイエンスハイスクール (SSH)

4年間の活躍... 以下の他多数受賞

平成30年度 SSH生徒研究発表会 文部科学大臣表彰  
高校生国際シンポジウム 最優秀賞 [シンガポール国際大会出場]

令和元年度 中華人民共和国青少年科学技術イノベーションコンテスト  
金メダル・高士其特別賞・マカオ大学科学技術イノベーション特別賞

令和2年度 日本学生科学賞 環境大臣賞  
SSH生徒研究発表会 奨励賞

令和3年度 Regeneron ISEF (国際学生科学技術フェア)  
Animal Science部門 優秀賞4等 (後日, 文部科学大臣表彰)  
Sigma Xi The Scientific Research Honor Society 2nd Life Sciences Award  
(シグマ・サイ科学研究優等生協会賞2等)  
SSH生徒研究発表会 ポスター発表賞・生徒投票賞



(日本学生科学賞 2020)



(Regeneron ISEF 2021)

# 国分高校SSHの見える化

## 校長としての立ち位置

- 1 「主体性」・「科学性」・「国際性」・「外部連携」・「組織性」  
が7割完成
- 2 変化の中にあって成長と成果の可視化が未成熟  
(課題点注視)
- 3 校長がすべきこと(余計なことはしない)

**運用と成果の見える化＝共有(職員・生徒)**

改善課題(30項目)

- ① 外部と内部の評価機能の改善
- ② コロナ下戦略立案
- ③ 連携の拡大強化

**中間評価**

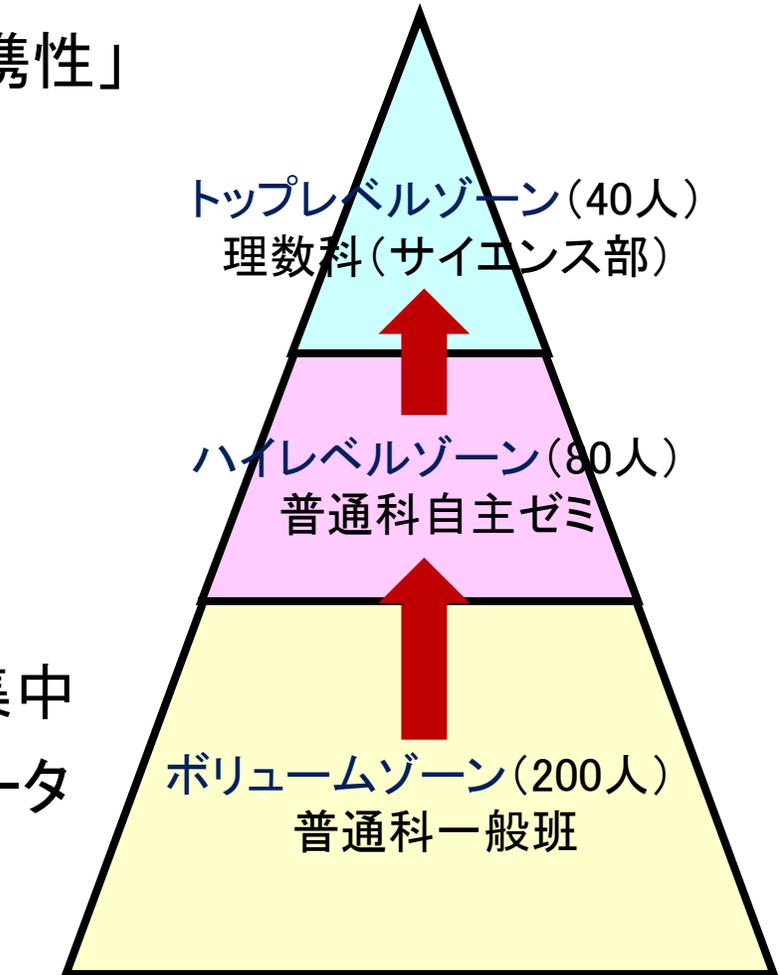
# 国分高校の全校体制の見える化

## 1 理数科(1CL)課題研究の理念と手法→普通科(7CL)に移植・拡大

- ① 理念は「高度な科学性・強靱な主体性・国際性・伝承性・連携性」
- ② 理数科から普通科の生徒・職員へ丸ごとの移植
- ③ 理数科サイエンス部→普通科自主ゼミ開設(3割参加)
- ④ 普通科指導案(理数科手法移植バージョン)の蓄積と集成
- ⑤ 理数カリキュラムの普通科への移植(STEAM教育)

## 2 独自の指導体制

- ① SSH運用ファシリテータと探究指導ファシリテータの分離と集中  
※ 生徒会の中に「生徒SSH委員会」-生徒の運用ファシリテータ
- ② 探究指導ファシリテータの拡大と指導力の向上
- ③ 主体性强靱化(テーマ・計画・文献調査・予算・連絡等)  
※ 教師は「余計なことはしない, 必要なこと(時間軸)はする。」  
※ 教師・生徒の**ブレストの日常化**, **オンラインの圧倒的な活用**



## 3 育成ゾーンの明確化 (追いつけ, 追い越せ)

# 理数科のカリキュラム改革の見える化ー物化生地課題研究強化

## 1 課題研究予算の獲得と充実

- 2007～2013 サイエンスパートナーシッププロジェクト採択(高大連携科学探究)
- 2016～2030 断続的に中高生の科学研究実践活動プログラム採択(同上)



## 2 課題研究の成果 2009～2018 各大会で60の賞を獲得(10年間)

- 2012県高校生理学研究発表会で物理・化学・生物・地学全部門で受賞
- 2017 日本学生科学賞で環境大臣賞・翌年ISEF(アメリカ合衆国)に参加(生物)
- 2018 中国四国九州理数科高等学校課題研究発表大会で最優秀賞(化学)



## 3 SSH採択後 2018ー2021 各大会での100の賞を獲得(4年間)

- 2018SSH生徒研究発表会 文部科学大臣賞(生物)
- 2019九州高校生理学研究発表会 最優秀賞(地学), 優秀賞(物理・化学・生物)
- CASTIC(於中国) 金メダル(生物)
- 全国高校総文祭 高文連賞(物理・生物・地学)
- 中国四国九州理数科高等学校課題研究発表大会 最優秀(地学)優秀(物・化・生)
- 2021ISEF(アメリカ合衆国)世界4位・特別賞のW受賞・文部科学大臣表彰(生物)



## 理数科の指導手法

- ① 理数科は全員サイエンス部に属する。世界レベルの先輩等とも日常的に交わり、テーマ設定や分析手法やプレゼン手法にも強い影響を受ける。「**縦の伝承**」という。
- ② テーマ設定は、**先輩や教師とのブレストを繰り返す**。
- ③ **教師の立ち位置は見守り**。基本的には多くは指導しない。教師は、多くの引き出し(材料)と**時間軸**を持つ必要がある。
- ④ 文献探査やアドバイスをもらう**研究者**、**検証方法**、**経費も自分たちで決める**。
- ⑤ 当初のレベルは低くても、審査員等に指摘されながら高いレベルを求めていく。**テーマ設定は課題研究の成否の80%を占める**。

(R2理数科主任からのインタビュー)

# 普通科の課題研究の手法の見える化—本校独自の成功・成長戦略

## 高度な主体性を持たせるためのスキーム

- (1) 理数科課題研究の考え方や手法を生徒と職員レベルで徹底して移植する。
- (2) 課題研究の良さや意義を職員全体で共有する。高次の共通理解を目指す。  
普通科全校体制を無理なく、かつ高次にやるという組織性の確保。
- (3) そのために生徒の主体性を極限まで生かし、モチベーションを高める。  
→ これが本校の普通科課題研究の肝腎となっている。
- (4) 「自主ゼミ」という新しい手法で、普通科の課題研究に、科学系人材育成のハイレベルゾーンを創出する。外部連携も含め、部活動レベルの活動を実施。
- (5) 職員の指導力向上と継続性のために、1年から3年まで、全ての課題研究の時間の職員用指導案と資料を作成、年度毎に更新。

※ 指導の共通性・継続性・業務低減のためにも作成。

(R2普通科職員からのインタビュー)

# 普通科課題研究の手法の見える化ー主体性と科学性の移植

- ① 課題研究の成否はテーマ設定が8割で、実際の研究は2割である。
- ② 普通科はSSH導入期であるが、教師がテーマを強引に誘導してはならない。テーマは一度決めても、生徒の成長に応じて変化するという柔軟な視点を持つ。
- ③ SSH導入期の生徒たちが、後輩たちのロールモデルとなるので、生徒たちが「楽しく、前向きに、意欲的に、主体的に」進めていく姿は、全てに優先する。
- ④ 研究過程でも、教師は問いによるブレストを繰り返すが、あまり細かい指示はしない。SSHスタートで自走できる探究的人材を育成することが、今後の国分高校普通科SSHの流れをきめる。
- ⑤ 県統計学コンテストに出品。受賞多数。科学性の確保に統計学は役立つ。
- ⑥ 第1回成果発表会(1年目)で、職員意識に大きな変化が生じた。

(R2普通科職員からのインタビュー)

# 普通科1年のテーマ設定の見える化 (主体性の向上)

## 1学期

「世界に誇る霧島学」や「サイエンス研修（企業やジオパーク等での研修）」を通して地域・科学に関する興味を高める。

## 夏休み

興味・関心のある学問系統を探ることと連動して、課題研究として取り組みたい分野を個人として考える。

1. 個人でのブレスト	① 生物	② 化学	③ 物理	④ 地学	⑤ 工学	⑥ 農水産	⑦ 生活科学	⑧ 芸術
2. クラスでのブレスト								
3. 9系統別に学年解体ブレスト								
4. 班編成の際の共通理解								
5. テーマを考える								

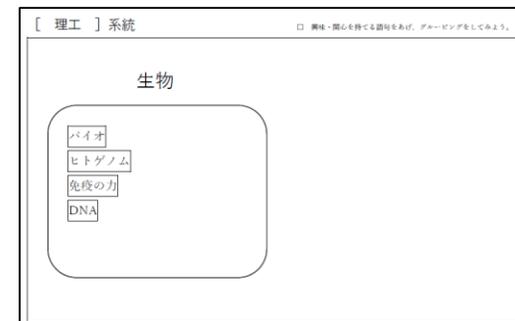
## GS実践講座 9・10月

これから取り組む課題研究について、主にテーマ設定に関する講座を実施する。

- ・ **テーマ設定講座**（理科教諭）
- ・ **アンケート作成講座**（数学教諭）

## グルーピング 10月から

① 個人での**ブレスト**



② クラスでの**ブレスト**

③ 9系統別に学年解体**ブレスト**（人文科学・社会科学・総合科学・教育・医歯薬・理工・農水産・生活科学・芸術）

④ 班編成の際の共通理解

- ・ 班の人数は4～6人
- ・ **納得いくまで班編成を繰り返す。**



⑤ テーマを考える（2月テーマ発表会）

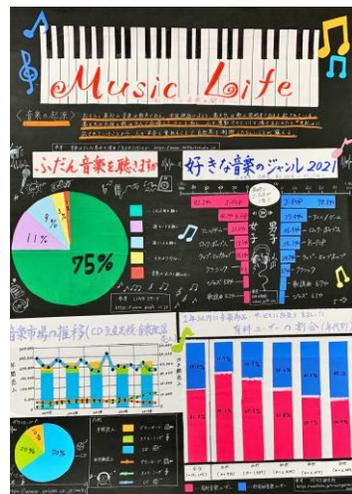
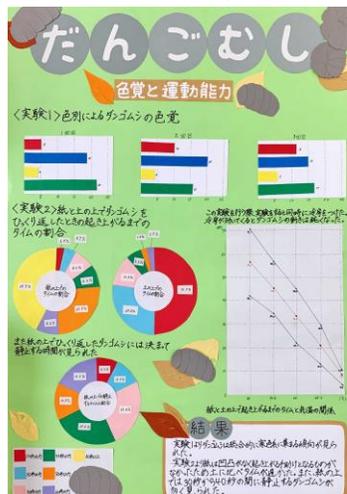
# R 3 普通科 2 年中間発表までの見える化① (科学性の確保)

4月～9月

系統別に分かれて班で協力して調査・実験を行う。**産学公民連携(連携先確保4割)**。**統計学講座**や**プレゼン講習会**等の**課題研究実践講座**を実施。(OJT)

7月～9月

調査結果を手書きでグラフにまとめ、全班が県統計グラフコンクール出品。**9班(／11賞中)**が受賞し、学校賞を獲得



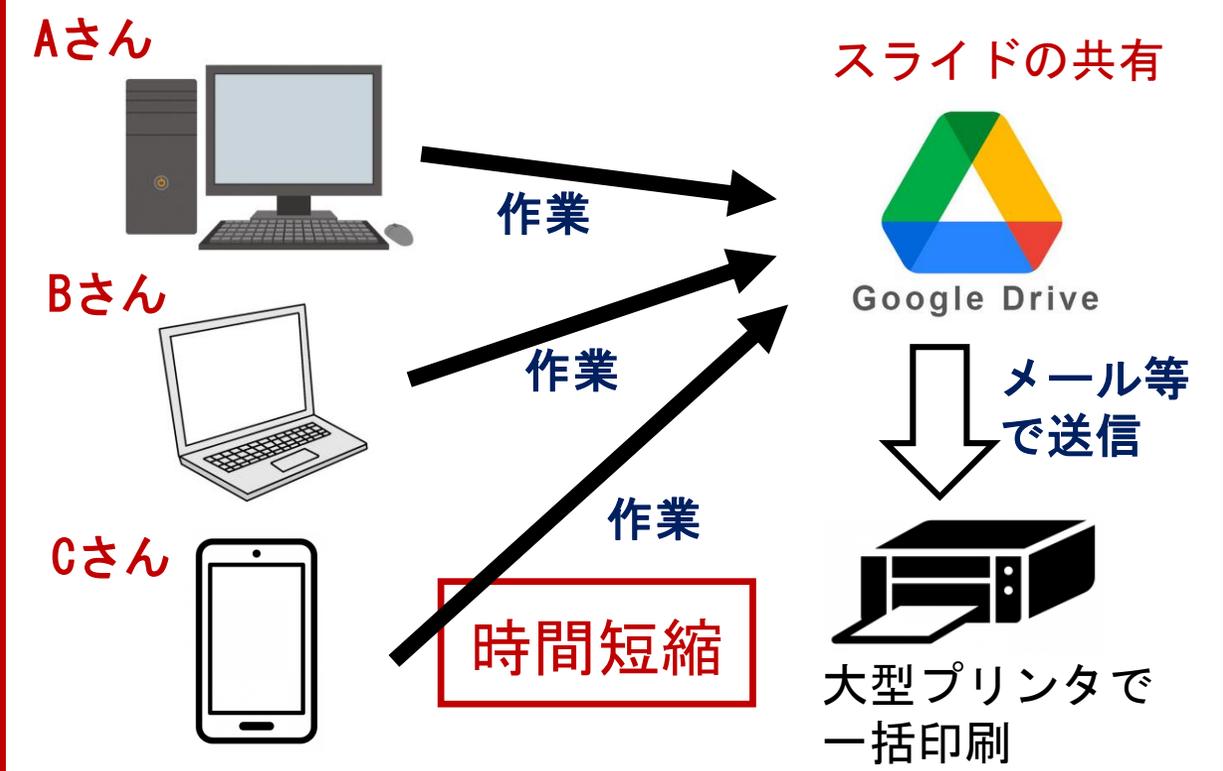
ポスター作成のICT化① 9月から

- (1) Surface (PC) の活用  
ギガスクール構想に伴い配布された Surface (PC) を活用し、ポスター・発表原稿等の作成を行う。
- (2) A0ポスター書式 (PowerPoint) を全班に配布
  - ・ A0ポスターの書式をweb上で全班に配布。SRの情報分野でPowerPoint活用のガイダンスを行う。
  - ・ 情報リテラシーに関する指導 (研究倫理に関する内容も含む) を行う。
- (3) Googleアカウントの活用
  - ・ 生徒個人のGoogleアカウントを配付し、活用について指導を行う。
  - ・ Gmailでポスターデータ等を提出。

# R 3 普通科中間発表まで見える化② (自走性の確保)

## ポスター作成のICT化② 9月から

(4) Google Driveを活用したポスター作成  
クラウド上にファイルを共有し、  
Googleアカウントでアクセスする。複  
数が同時に作成に参加できるとともに、  
自宅等でも各端末からアクセスできる。



## 令和2年からのオンライン活用数

コロナ禍の影響により、オンラインでの  
外部指導，コンテスト，講座等の活用が  
増加している。令和2年度から令和3年  
11月までの**オンライン活用数は99件**，活  
用**延べ人数は2131人**にのぼる。

### 【令和2年からのオンライン活用数】

	大会・ コンテスト	講座・ 指導	職員 研修	合計
回数	21	62	16	99
人数	330	1744	57	2131





# 本校理数科卒業生(6年前)の声 ←「高校の課題研究は今、役に立ってる？」

## 卒業生のインタビュー

### 企業研究員(H27卒)

- 高校でDNA解析技術を身につけたことで、大学の研究を志し、今この職にいる。
- 何でも疑問を持つ習慣ができ、自ら気づく習慣ができた。チームでの解決も多角的な見方を与えてくれている。高校生の課題研究は一生ものの価値があった。

### 市役所職員(H27卒)

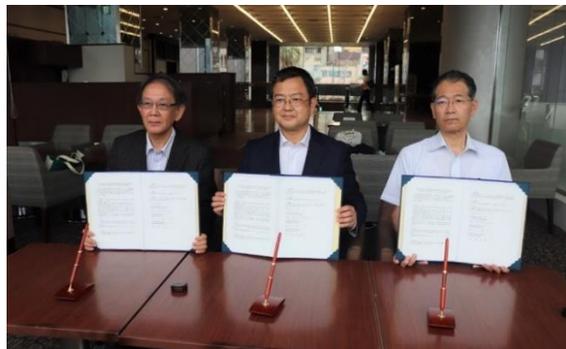
- JSEC等は質問レベルが高く、瞬時の判断力が自分のプレゼン力を高めた。もともと人とはうまく話せなかったが、高校の課題研究で、大学や社会でも、論理的・科学的に考えて、多くの人との議論に参加できるようになった。社会では、課題への気づきが速ければ速いほど、次の対応も早くできる。とても役立っている。

### 大学水産学部(R3年卒)

- 海洋生態研究サークルでサンゴの研究をしているが、研究の手法を知っているの  
で、同級生より速く進めることができる。研究者になる目標は、国分高校で課題研究の手法を学んだからである。
- 高校時代は結果より過程を大切に、自分の研究スタイルの基礎を作ってほしい。

# 令和3年度 主体性・科学性確保のための産学官協定の拡充

主な連携内容	主な連携先
① 大学単位先行取得制度の創設（モデル校）	鹿児島大学
② 鹿児島県高校生課題探究発表大会の創設・共催	鹿児島国際大学
③ 県外大学との包括的高大連携協定	第一薬科大学
④ 海外大学留学に関する連携協定	台湾7大学
⑤ 鹿児島県SSH交流フェスタの実施（今年度は第3回）（幹事校2年目）	県内外SSH校・他
⑥ 県外高等学校との連携協定	宮崎県立延岡高等学校
⑦ 小学校・中学校との探究に関する協定（拡大予定）	霧島市立国分南中学校・他
⑧ 霧島市役所・鹿児島県庁各課との課題研究に関する連携（拡大予定）	霧島市・鹿児島県
⑨ 企業・NPO法人等との課題研究及びキャリア教育における連携協定（予定）	京セラ・トヨタ・鎌田建設・他



## 「単数のスーパーティーチャーより複数のファシリテータの成長・拡大」

- 1 **校務分掌の全面再構築** → 各系の**業務の平準化**（業務の見える化）  
※ 実働の少ない業務・必要のない系の削減・統合
- 2 **業務の公平分担** → 担任は指導に専念，担任以外は校務に専念  
（指導ファシリテータと運用ファシリテータの分散と集中）
- 3 中長期スケジュール（**5年～10年**）の見える化→自校ビジョンと業務の明確化
- 4 校内メール・電話の活用  
※ **校内メールでのヒアリング**（SSHでは5割）
- 5 **寸暇の研修**（2分～5分 － 1ペーパー）
- 6 **オンラインの活用**（時間と予算の削減）
- 7 課題研究での生徒の**主体性・科学性**－SSH業務削減の一番地  
※ 「働きがい」の創出＝自校レガシーは生かし切る。「断捨離」しすぎは×  
※ **SSH**（申請・中間評価・報告書）は，**業務整理の絶好の機会**

時間外勤務時間月平均(申請前との比較)

	1年目	2年目
錦江湾	－50分	－4時間15分
国分	－13時間25分	－26時間57分

# 私の運営の理念と方法（話者の考え）

## 運営の理念

### SSH全校体制の構築



- ・ 事業価値の見える化（なぜSSHをやるのか）
- ・ 職員が積み上げた教育レガシーの可視化



- ・ 働きやすさと働きがいの創出に絶えず向き合う姿勢
- ・ 教師が誇りを持って授業や課題研究に取り組める風土作り

※ 職員のやわらかな協力体制

## 運営の方法

- 1 教育的価値の見える化
  - ① 自校報告書や過去資料の読破
  - ② 教師・卒業生インタビュー
  - ③ 他県SSH資料の渉猟
  - ④ 他県校長先生との対話と訪問
- 2 社会的・歴史的価値の見える化
  - ① 文部科学省関連資料や指導要領・中教審答申等の熟読
  - ② 自校の歴史の熟読・創設期の理念の把握 →「感謝」→「共有」
- 3 事業単純化→絶えざる小改善→大きな変化

# 学校でのイノベーションの共有

メンバーが聞きたがるのは、リーダーのビジョンではなく、どのようにして自分たちの夢や希望がかなえられるかだ。彼らはリーダーが描く未来予想図の中に、「自分の姿」を見たがっている。リーダーの任務は、個人的世界観を売り込むことではなく、共有のビジョンをいきいきと伝えることだ。 (ジェームズ・M・クーゼス)

企業と学校の違いは、組織が指導者(専門職たる教師)によって成り立っていることにある。学校組織は、職階が完全な縦軸ではなく、生徒の教育という仕事を協働して行う組織体である。そういう意味で、学校経営は、教師集団の自発的な意見や行動の受容が必要であり、ビジョンもイノベーションもその受容を基点に形成されることが肝要である。 (話者)

- 人はその長所のみ取らば可なり。短所を知るを要せず。
- 小過を咎むる要なし。ただ事を大切になさば可なり。
- 用うる上はその事を十分に委ぬるべし。
- 人材には必ず一癖あるものなり。器材なるが故なり。

(荻生徂徠)

# 謝辞

- ご清聴，有り難うございます。
- SSH運営や各種校長会や2回全国大会を通じて，鹿児島まで来ていただいた沢山の校長先生，また訪問・電話やメールでもおつきあいをいただき，多くのことを教えていただいた全都道府県の現校長先生や退職された先輩校長先生に心より御礼申し上げます。
- 最後に運営の見える化や資料作成のために協力してくれた国分高校の優秀なスタッフの皆さん，特に山田島崇文教頭，運営の中心を担う濱田大輔SSH主任，宇都鉄則SSH副主任に感謝します。

鹿児島県立国分高等学校 TEL:0995-46-0001  
SSHメールアドレス kokubu.ssh@gmail.com